〈2〉「農村×まちなか」連携企画
ーマルシェで農業を元気に！ー

山口果樹園　山口 美輝

1　はじめに

山口果樹園は，宇都宮市東部の清原地区で，家族経営により，「幸水」や「にっこり」などの多品目の梨を栽培している。おいしく安心して食べられる梨づくりにこだわり，化学肥料や農薬を極力控えた有機栽培を行う。

近年長年の成果が評価され，平成21年には「第３回 栃木県元気な農業コンクール 下野新聞社長賞」，平成25年には「第14回全国果樹技術・経営コンクール 農林水産大臣賞」を受賞することができた。

私は梨農家であることを生かして，「元気で明るい農業」を農村からまちなかへ発信したいと思っている。ここでは，その活動の様子を紹介する。

(1) マルシェとは

みなさんは「マルシェ」をご存知だろうか。マルシェとは，フランス語で「市場」を意味し，地元の農家が生産した“自慢の一品”を生産者自ら販売しながら，お客様との“顔の見えるやりとり”を楽しむことができる生産者と消費者をつなぐ交流の場でもある。

農家は農作物をどのように手をかけながら育て，収穫し，どのように料理すると美味しいか，また，今年の天候が農作物にどう影響を及ぼしたかなどを消費者に直接話すことができる。時には，農作物の話から離れ，家族やペットの話題などを楽しみながら，販売するのだ。

(2) 市街地活性化プロジェクト

宇都宮の顔ともいえる「オリオン通り」は，いつの頃から活気がなくなってしまったのだろうか。私が学生の頃（今から約30年前）には，大勢の人で賑わっていた憶えがある。学校帰りには通学路でもないのに，わざわざ遠回りしてオリオン通りを抜けて帰っていた。土日などの休日はあまりの人混みで，自転車にも乗れずに押して歩いた。賑やかで，華やかでキラキラとしていた。私にとっては，宇都宮の華だった。

そんな宇都宮のまちなかの市街地が，少しずつ元気がなくなり，人通りも減って寂しくなった。シャッターが閉まっているお店も多くなり，本当に寂しくなった・・・。

嫁いでからは，オリオン通りに行くことは，ほとんどなくなっていた。久しぶりに訪れ，寂しくなってしまった光景を目の当たりにした時，ふと「もったいないな」と思った。

そのことをきっかけに，以前から考えていた「マルシェ」をオリオン通りで開催できないかと思い立ち，曲師町にある「世界のお茶の専門店　Y’ｓ tea」の根本社長とのプロジェクトを立ち上げることになった。

これがきっかけとなり，「サンセット・マルシェ in オリオン」が始まった。

(3) 農村×まちなか

まちなかでのマルシェの開催，私たち生産者が農村からまちなかへ繰り出して，接客・販売する。「それが何か？」と思われるかもしれないが，実は生産者にとって，これがものすごく大きな一歩なのである。

日々の農作業で休みなく働いている農家にとって，目の前の農作物の管理から目を離し，場所を変えて自ら販売することは，簡単なことではない。農家は，作物をつくるプロであっても，販売に関しては素人同然である。ましてや，慣れない接客もしなければならない。

マルシェで販売を始めた当初は，緊張で会話や手つきもぎこちなく，周りが見ていられないほど

だった。しかし，何度かこなしていくうちに，自分で育てた農作物をＰＲしながら，自信をもって販売できるようになり，楽しめるようになっていった。

そして何より嬉しいのが，商店街のお店の方々が買いに来てくれることだ。マルシェは，生産者と消費者の交流の場となっているだけでなく，農村とまちなかの交流の場にもなってきている。

私たちが農村からまちなかに新鮮な作物を届けると，まちなかで暮らしている人，特に高齢者の方が喜んでくれる。「車に乗れないから，直接買いに行きたいけれど，行けないのよ」，「やっぱり新鮮さが違うわね」などと言って，笑顔で声をかけてくれるのが本当に嬉しい。

最近では，梨を買ってくれた人が，実際に梨がつくられている場所を見てみたいと，果樹園まで訪れることが増えた。梨が畑一面にたわわに実った風景を見ると，感動してくれる。多くの方が今まで農家から直接購入したこともなかったという。まちなかに暮らす人たちは，農業に関心があっても，自ら生産農家に出向く機会がなかなかないのである。

２ サンセット・マルシェ in オリオン

「サンセット・マルシェ」は，平成25年10月26 日で４年目，計５回目の開催となる。今回は，目標だったオリオン通りの端から端（江野町商店街から曲師町商店街）までを使って開催することができた。農産物，飲食，紅茶，雑貨，アクセサリーなど合計約50のブースが出店した。

私たち農家は，作物を収穫するために，土作りから始まり，種をまき，水を与え，日光をたくさん浴びせ，まるで自分の子どものように手をかけ，愛情を込めながら育てる。丹精込めて育てた自慢の農作物を自分の手で販売することができ，何より，お客様からの「美味しかったよ！」の声は，生産者としての喜びにつながる。とても素晴らしいことだと思う。

サンセット・マルシェには，宇都宮白楊高校，宇都宮大学，栃木県農業大学のブースもある。学生が育てた農産物や手作りの加工品を販売する。毎年長蛇の列ができ，あっと言う間に完売するほどの人気だ。宇都宮大学の学生に関しては、ボランティアスタッフとしてマルシェの運営にも携わってもらっている。お客様の生の声を聴き，自分で考え行動する，体で経験することが一番の勉強になる。まさに，体験型学習だ。

私たち生産者は，朝一番で新鮮な野菜と果物を収穫・荷造りし，自分たちも“おしゃれ”をする。マルシェでは，その場の雰囲気を“おしゃれ”に演出することも大切にしているからだ。「魅せる演出」をすることで，生産者もモチベーションが上がるし，お客様も喜んでくれる。

魅せ方のひとつに，販売用の値札の色を決め統一感を出している。生産者は黒のサロン（エプロン）を巻くことにした。それだけで，市場全体に統一感がでて，不思議と「みんな仲間だよ！」という感情までも込み上げてくる。普段は黙々と農作業に追われている個人経営の農家も，マルシェの時は違う。各農家の点と点がつながり線になる。そして線がつながり輪になることができる。

マルシェは，農作物の販売を通じて，多くの人との出会いも得られる場でもある。これは，農業が無限に広がる可能性への入り口になるものと考える。

写真１　サンセット・マルシェの様子

３　サーズデー･ナイト･フィーバー

「サーズデー・ナイト・フィーバー」(以下「サーズデー」という）は，毎月第１・第３木曜日の夕方の５時から夜９時まで，二荒山神社のバンバ広場で開催されている。

山口果樹園は平成25年８月から出店を始め，梨の専業農家であるので，販売している商品は，「豊水 100%の梨ジュース」，「ドライフルーツ」，「梨のコンフィチュール」，梨フレーバーの「おもてなし紅茶」，梨（幸水・豊水・新星・あきづき・にっこり）など梨づくしである。

平日の夜なので，仕事帰りのスーツ姿のサラリーマンや家族連れも多く，とにかく，小さい子どもから年配の方まで，幅広い年齢層の方が来てくれる。

飲食スペースもあり，各飲食ブースで美味しそうな食べ物を買い，楽しく会話を弾ませ，音楽を聴きながら食べる。毎回，素敵なミュージシャンの演奏もあり，大通りに面した広場の一角とは思えないほどゆったり，まったりした時間を過ごすことができる。日々の慌ただしい農作業からは，想像できないほどのスローで優しい時間に，出店しながら私自身も癒されている。

昨年，ちょうど「サーズデー」の日が十五夜だった。まんまるお月様がとても綺麗で，ビルとビルの間から「サーズデー」の広場を照らしてくれていた。

ザルにススキも並べて飾り，雰囲気も最高。農村地域での十五夜の飾りは見慣れたものだが，まちなかでのお月見もまた良い。この日は何人かの若い人たちが梨を１個ずつ買ってくれた。普段若者は，その場で食べる分だけ買い，梨を買って帰ることはあまりない。面白いことに「お月様みたいにまんまるだから，お土産に買っていく」というのだ。なんともありがたく「十五夜」に感謝だ。十五夜なので，いつもよりまんまるな梨が売れた。

山口果樹園では，できる限り家族で出店する。娘たちも，お客様とのコミュニケーションを楽しみながら手伝ってくれるので大助かりだ。農繁期で，私がどうしても時間に間に合わない時などは，先に行って，ひとりで出店してくれる。「サーズデー」に出店するようになってから，家族の会話が，以前にもまして増えたように思える。

写真２　出店ブースの様子

写真３ サーズデー・ナイト・フィーバーの様子

４　生産者が“ストーリー”を語る

「元気で明るい農業」を営むためには，今までのように１日中畑に入りきりで黙々と働いてばかりでは，前へ踏み出せないのだと思う。残念ながら，現在は作れば売れる時代ではなくなってしまった。自分たちが作る農産物の美味しさを伝えるにためは，どうすれば良いのか。これは今後の農業の課題であり，生産者自身で考えていかなければならない。

私はいつも思うことがある。私たち生産者がどんなに丹精込めて作っても，消費者の評価は味だけ，「美味しい」，「美味しくない」，「普通」の一言で，完結してしまう。

生産者は，農作物が商品になるまで，毎日の天候を見極めながら，気を配り，たくさんの手間と労力をかけている。そして何よりも，食べてくれる人への思いを込めて育てている。しかし，このような作物に込められた思いや商品になるまでの過程，作物がもつ“ストーリー”，を農家から消費者へ伝えることはとても難しい。もしも，消費者が一個の梨がかれらの口に入るまでのストーリーを知って食べたら，その味わいの深さは違ったものになると思う。

だからこそ，マルシェなどで，生産者が自ら販売することは大事なことだ。そこでは，生産者が消費者に，作物がそこに至るまでのストーリーを直接伝えられるし，消費者はスーパーなどでは知りえない作物のストーリーを生産者から直接聞くことができる。

すべての商品を生産者が直接販売することは，困難である。しかし，このような機会を通じて，販売をやってみると色々なことがみえてくる。

たとえば，山口果樹園ではマルシェに年 12 回ほど出店をしているが，生の梨だけよりも，梨を使った複数の商品があったほうが，お客様を楽しませることができることがわかった。梨ジュースやドライフルーツをはじめ，少しずつであるが自分たちで加工品の種類を増やしている。そうすることで，私たちは，これらの加工食品について，どうして・どんなふうに・どこでできたのかを全て説明することができる。

消費者は，その商品ができるまでにどのような過程を経ているのかを知りたいと思っており，生産者がこれを説明することができれば，商品とともに安心感も与え，継続的な消費につなげることができる。安心・安全を求める消費者に，生産者自らが商品の“ストーリー”を伝えられるマルシェは，私たちにとって大切な場所なのだ。

５　農業が地域を元気にする！

「農業王国うつのみや」なのだから，第一次産業に従事する私たちが輝かなくてはならないと思う。農業に元気がないと，まち全体に力がみなぎらない。そのためには，色々な業種との交流が大切である。昔ながらの農業にも，もちろん大事なことがたくさんある。守るべきことはきちんと守りながら，遊び心も取り入れて，仲間とマルシェを続けていきたい。

マルシェは，決して高い売上が見込めるものではないが，しかしながら，生産者が消費者から求められるものを見つめ直す良いきっかけになる。また，これからの農業の広がりに結びつくチャンスも期待できる。

今年もまた，地元や県内の若手農家に声をかけ，「サンセット・マルシェ in オリオン」に自慢の作物を並べる日が来るだろう。

さあ，これから，自分自身も，家族も，地域もみんなが元気に輝けるように，夢と希望，そして感謝の気持ちを忘れずに，農業を盛り上げて行こう！！！